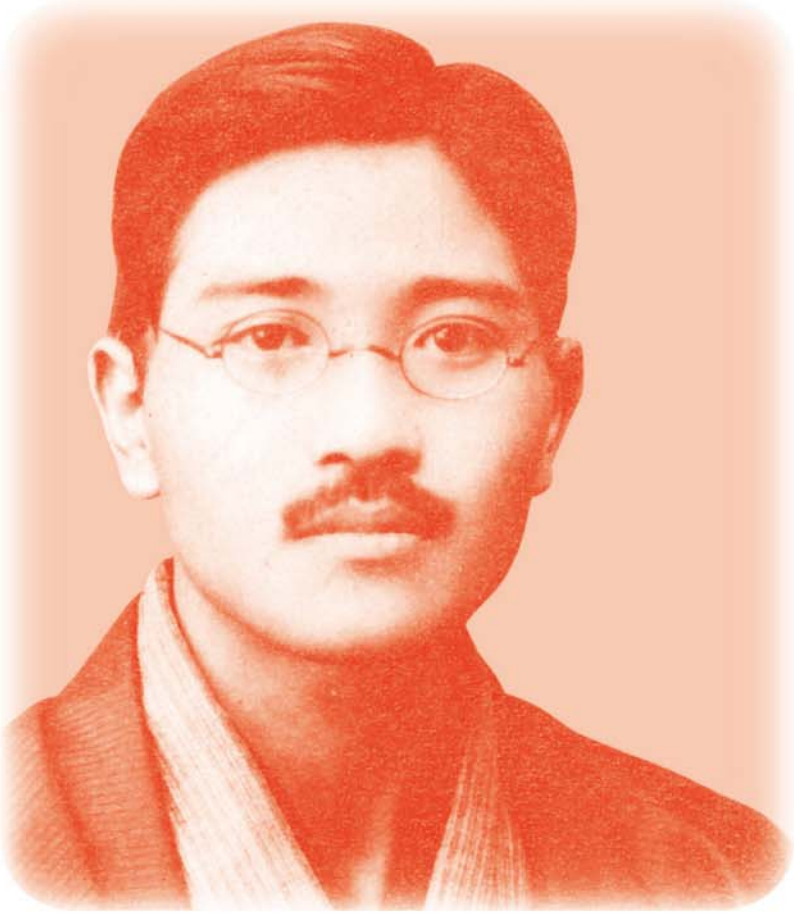


第二十二回

白鳥省吾賞

受賞作品集

「自然」の詩

「人間愛」の詩

宮城県栗原市
栗原市教育委員会
白鳥省吾記念館

大正・昭和にかけて
日本の詩壇を代表する一人であった白鳥省吾は、
「農民の魂」をもって民衆詩を歌いあげ、
詩史に一時代を画した。

詩人・白鳥省吾の出現は、
故郷の人々の喜びでもあり、誇りでもあった。

白鳥省吾賞は、これらの功績を顕彰するため、
「自然」、「人間愛」をテーマにした
口語自由詩の作品を広く募集し、
審査・表彰するものである。

白鳥（しろとり）　省吾（せいご）　略歴

1890年　宮城県栗原郡築館村(現在の栗原市築館)に生まれる。
1913年　早稲田大学英文学科卒業。
1914年　第1詩集『世界の一人』を自費出版。
1918年　ホイットマンの研究論文・訳詩を発表。
1919年　『民衆』第11号に白鳥省吾詩集掲載。詩集『大地の愛』出版。
1920年　ジャーナリストから詩壇の中心人物とされる。雑誌等に多数発表。新潮社『日本詩人』が創刊し編集者となる。
1922年　北原白秋と文学論争をする。
1926年　「大地舎」を創設し、詩誌『地上楽園』及び詩書の出版を始める。
1928年　詩人協会を結成。
1939年　大日本婦人連合会発行の月刊誌『女学生新聞』編集長となる。
1961年　日本農民文学会会長となる。
1962年　日本歌謡芸術協会会長となる。日本民謡協会文化章受賞。
1965年　築館町名誉町民となる。
　　栗原郡名誉郡民となる。
　　日本詩人連盟会長となる。
1968年　勲四等瑞宝章が授与される。
1973年　逝去。昭和天皇から銀杯が下賜される。

《目次》

あいさつ……栗原市長　千葉　健司……1
受賞者紹介……2
一般の部・受賞作品
●最優秀賞　井上　尚美「葉桜の頃」……3
●優秀賞　三船　杏「海を見ている」……3
●優秀賞　明石　裕里「青空」……4
小・中学生の部・受賞作品
●最優秀賞　山田　陽輝「背負い、繋ぐ。」……5
●優秀賞　菊地　小春「流れ星」……5
●優秀賞　内山　芽泉「夜中の訪問客」……6
●特別賞　齋藤悠一郎「二〇二〇年夏」……6
●特別賞　菅原　優花「空色の風船」……7
●特別賞　鈴木　毬子「あの日の私」……7
審査員奨励賞
●一般の部　雪柳あうこ「ことば」……8
●小・中学生の部　佐藤　蒼來「心のてんびん」……8
●小・中学生の部　山崎　朝香「大丈夫」……9
審査員紹介……10
第二十二回白鳥省吾賞選評……12
寄稿「第21回白鳥省吾賞を受賞して」照井　良平……15
白鳥省吾氏御令息あいさつ……白鳥　東五……16
白鳥省吾関連図書紹介……16
都道府県別応募状況／募集概要……17

あいさつ

栗原市長　千葉健司

栗原市は、国定公園「栗駒山」に抱かれ、清流迫川が貫流して大地を潤し、ラムサール条約指定登録湿地の伊豆沼・内沼は、夏はハスの花が咲き、冬は白鳥や雁などが飛来する渡り鳥の楽園となるなど、市民をはじめ多くの方々の心を和ませてくれる豊かな自然が広がる田園都市です。

このような豊かな自然に恵まれ、若者定住や子育て施策等が充実している栗原市は、「田舎暮らしの本」による「二〇二一年版 住みたい田舎ランキング」で、東北エリア第一位となり、五年連続で上位三位を獲得しております。全国的にも注目度が高まっておりますが、この栄誉に甘んじることなく、これまで以上に魅力溢れるまちづくりを進めてまいります。

さて、郷土出身の白鳥省吾先生は、生涯このふるさとの山河と民衆をこよなく愛し、農民の姿や純朴な人々の生活から深い愛郷心と、農民魂をもって民衆詩を詠いあげ、口語自由詩の発展に大きな業績を残した民衆詩派の代表的詩人であります。

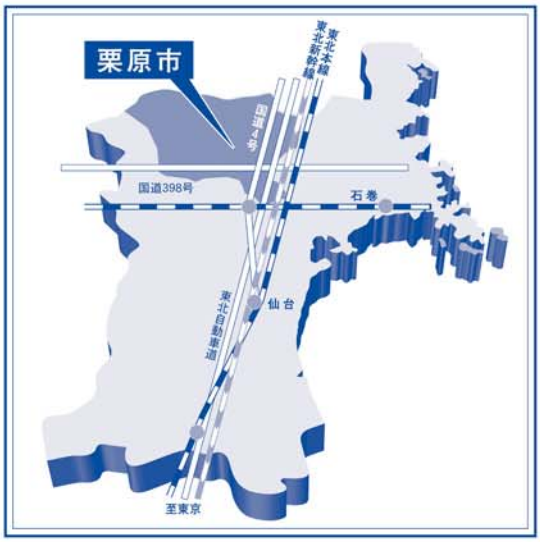
こうした省吾先生の業績を後世に伝えるため、平成十年七月一日に「白鳥省吾記念館」を開館し、あわせて省吾先生の功績を顕彰するため「自然・人間愛」をテーマとした自由詩を募集し、優れた作品を表彰する「白鳥省吾賞」を創設し、今回で第二十二回目を数えることとなりました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により日本のみならず世界中の人々の生活に影響が生じ、既存の事業などは変更や中止を余儀なくされました。その中でも白鳥省吾賞の応募作品は日本各地から寄せられ、高校生以上の一般の部には七百四十八編、小・中学生の部には五百七十編、合計千三百十八編の作品が寄せられたことは私の喜びとするところであります。

表彰式は受賞者の皆様や御列席いただく皆様の安全を考慮し中止といたしましたが、晴れて受賞されました皆様には、衷心よりお祝い申し上げますとともに、今後益々の御活躍を御期待申し上げます。

また、作品の審査をお願いいたしました先生方には、大変な御苦労をおかけいたしましたことに感謝の意を表するとともに、本賞の募集にあたり、御後援をいただきました関係機関をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から御礼を申し上げ、あいさつといたします。

宮城県栗原市



市章

デザインは、栗原市の頭文字、ひらがなの「くり」をモチーフにしたもので、シンプルにバランスよく、活力のある親しみやすい形で表現しています。

緑色は、自然たっぷりの田園都市をイメージし、中央の形は、栗原の象徴「栗駒山」と、米どころの作物「お米」を合わせて表現しています。

―平成十七年九月十五日制定―

受賞者紹介

一般(高校生以上)の部

最優秀賞
井上　尚美
「葉桜の頃」
静岡県島田市

優秀賞
三船　杏
「海を見ている」
東京都練馬区

優秀賞
明石　裕里
「青空」
広島県広島市

審査員奨励賞
雪柳　あうこ
「ことば」
東京都板橋区

小・中学生の部

最優秀賞
山田　陽輝
「背負い、繋ぐ。」
宮城県栗原市立
若柳中学校　三年

優秀賞
菊地　小春
「流れ星」
宮城県栗原市立
鶯沢小学校　五年

優秀賞
内山　芽泉
「夜中の訪問客」
愛知県岡崎市立
竜海中学校　一年

特別賞
齋藤　悠一郎
「二〇二〇年夏」
茨城大学教育学部
附属小学校　六年

特別賞
菅原　優花
「空色の風船」
宮城県栗原市立
築館中学校　三年

特別賞
鈴木　毬子
「あの日の私」
宮城県栗原市立
築館中学校　二年

審査員奨励賞
佐藤　蒼來
「心のてんびん」
宮城県南三陸町立志津川小学校　六年

山崎　朝香
「大丈夫」
宮城県栗原市立金成中学校　二年

※審査員奨励賞は、審査会において入賞作品と遜色がなかったことにより、特にその名を残すことになった作品です。

一般（高校生以上）の部　受賞作品

最優秀賞　井上　尚美

葉桜の頃

全身を桜色に染めて数多の人を憩わせた桜花
今は花の時を終えてジョギングや散策する人
　を葉桜の下に楽しませている
真みどりの風と生まれたての光が
私のところまでとどく
朝一番の手術に備えて私は今癌病棟にいる
手際よく準備を進めている看護師
その傍らで家族がそれぞれの面持ちでいる
手術着に着替えた私のパジャマを娘が丁寧に
　畳んでいる
やがて麻酔薬が注入される点滴の滴るさまを
　静かに見つめている夫と息子
無言の励ましを私は全身にあびている

今は　静寂な佇まいの体の一部分でしかない
　今日喪失する乳房
心も体も充分に準備はできているよ
その時突如　緑の風が吹いて
震えるような至福の一瞬を蘇らせる

初めての授乳のとき
今の今まで私の身の内に聞いていた鼓動を
私の胸の上で聞く不思議な感動と戦き
誰に教えを乞うたわけでもないのに
小さな蕾のような唇がせりあがってきて
（其の可愛さとは裏腹に）
必死に乳房に食らいつく動物的な逞しさ
飲み干して眠りに入るときの花びらから漏れ
　るいのちの香しさ　その命
どんなに強い風雨からも守ってみせるよ

あの日
私は花をすでに脱ぎ捨てていたのだろう
いのちを繋ぐために花を葉に変えることは
とても神秘的で美しい約束ごとなのだ

午前八時半　さあ参りましょうか
ハイキングに誘うような看護師の明るい声

優秀賞　三船　杏

海を見ている

蓋に付いたアイスを舐め取る容易さで
奪い尽くそうと　あの日に海が上った坂を
今日は私が下りている
海風に頭の中身まで攫われないように
麦藁帽のつばを両手で強く握りながら

誰かの額縁の中の津波しか知らない私でさえ
行き場がない怒りを持て余しているのに
被災地から復興地へと変わりゆく街は
建物を瓦礫に変えた海を
人間を遺体に変えた海を
日常を理想に変えた海を
記憶から歴史に送り出してしまったようだ
あの青は本当に海の青だろうか
表には快晴を映しているだけで
裏には荒ぶる黒いうねりを隠している
果てしない鏡ではないのだろうか

鋭い舳先が水平線を切り開き

見覚えのある船が顔を出す
漁に出ていたおじいさんは津波に呑まれ
漁船だけが吐き出されて戻ってきたと
それでも漁師になりたいと、なるのだと
あなたが見せてくれた写真の通りの漁船！
生きていることを言い訳にして
麦藁帽をでたらめに振り回してみると
片羽でどこへでもどこまでも飛んで行けそう
おじいさんの眠る海と天井で区切りたい空
二つの巨大な未知に挟まれてなお
目に痛いほどの白で青を押し退ける漁船が
真っ直ぐな汽笛で呼応した
それは新しい海の産声だった

私もあなたたちと同じ海を見ている
善意なく私たちを生かし
悪意なく私たちを殺す
世界の縮図としての海を見ている

優秀賞　明石　裕里

青空

いくつもの樹木たちが路面電車の車窓のようにすれ違う
犬の散歩道
エノキ　クスノキ　ムクノキ
クロガネモチ　ユーカリ　ヤナギ
樹木たちの名札には名前の上に被曝樹木と前置きがゴシック体で記される
七十五年前のできごとを体験し無言で立っている生きたみどりの証明群
わたしもわたしの犬も体験していないこと
樹木たちは、そこにいる
ずずんと青空に向かって伸びている

ヤナギに向かって犬がホイッスルのように吠えた
誰もいない周囲
たれさがる葉とたわむれ深い傷の入った幹の匂いをフンフン嗅ぎ尾をふっている
引っ張っても中々離れようとはしない

犬にはヤナギの声が聞こえるのだろうか
人には聞こえない樹木の声が聞こえるのだろうか

あの日は、雲ひとつない青空だった
青空だったから落とされた歴史
七十五年間、草木も生えないと言われながら
逞しく健気な時間はあっという間に過ぎて人と同じように死んでいった多くの樹木たち
どれほどの傷なのか奥に何があるのか分からないヤナギの幹に聴診器をあてるよう慎重に触れる
犬がそれに応えるよう真摯に吠えた
よく生きていたね
雲ひとつない青空にわたしの声はすぐに吸いこまれていく

小・中学生の部　受賞作品

最優秀賞　山田　陽輝

背負い、繋ぐ。

雨が降ると香るのは金木犀ではなく、アスファルト。
聞こえてくるのは家畜の鳴き声ではなく、モーターやエンジン。
森はいつしか禿げて陽の光を集め、田園は緑の隼が駆け抜ける。

先祖が見てきた景色は、家族団欒の様子と郷土。
長年家族を養ってきたその指は、腫れて太く、大きく、そして逞しく。まだ慣れないスマホは小指操作。
母の味と優しさを伝えてきたその指は、白く、深く、そして暖かく。食材の香りが染み付いた指はシワだらけ。
幾度と経験した腱鞘炎と、汗が染み込んだつなぎ。
少しずつ曲がり始めた腰。風に靡く髪は、まるで蝶ではなく老いた白鳥。

台所に響くのは、包丁とまな板がぶつかる音。
家中に夕暮れが香る。
夕暮れの香りは私たちの血に刻まれている。
今宵も、竹林は踊り、瞳には月が映る。
先祖が望み、繋いできた、秋に燃える恵みの栗駒山。先祖が繋いできた命を、栗駒山という名の襷を、私たちは背負い、繋いでいかなければならない。
そう言って私は今日も夕暮れを、蜩と共に待つ。

そして私もまた、夕暮れの香りを、襷を繋いでいく一人なのだ。

優秀賞　菊地　小春

流れ星

家の電気を消して外に出る
近所の街灯がうす暗く光る中転ばないよう
にゆっくりと歩く
ようやく庭の少し広い所にたどり着いた
「せーのっ！」
バサッ
わたしとお姉ちゃんは大きなシートを広げ
てそこにねっ転がった
空にはたくさんの星がかがやいている
わたしもお姉ちゃんも空も見上げたまま言
葉が出てこなかった
「わぁ、きれいな星空だね。」
そこにお母さんがやって来た
お母さんもシートにねっ転がると空にうか
ぶいろいろな星座を教えてくれた
「あれが北と七星。これがカシオペア座。
こっちにはさそり座もあるよ。」
ずっと空も見上げているうちにわたしは空
にすいこまれそうな気持ちになった
あれ、赤い星が動いている
なんだ飛行機か
今度はこっちで青い光りがヒュンと動いた
もしかしてＵＦＯかな
「あっ。流れ星！」
お姉ちゃんがさけんだ
いいなわたしも見たいな
今よりもっと目を開いて空を見つめる
すると小さな星が一つ流れた

わたしだけが見えた流れ星
一しゅんで消えた
願いごとするのわすれちゃった
その時北の空に大きな星が流れた
今度はゆっくりとほうきみたいに
わたしもお母さんもお姉ちゃんも見えた
でもあまりにきれいでお願いごとするのま
たわすれちゃった
次に星が流れたらこうお願いしよう
またみんなで流れ星が見れますように

優秀賞　内山　芽泉

夜中の訪問客

君は突然やってきた
君は変わり者らしい
木を選ばず
我が家の雨戸なのだから
そう言われても仕方ないさ
君には庭の木が見えないのかい？
（危うく潰ぶすところだったよ）
なぜ虫嫌いの私の部屋に来るのさ
しかも夜中に
小さな物音響かせて
ゆっくりゆっくり移動してゆく
細い爪が当たるような音が
私を逆撫でする
テスト勉強どころではない
君は私の気持ちなど無視して
脱皮を始めてしまった
背中がうごめいている
エーリアンみたいだ
私の背中もゾクゾクする
テスト勉強どころではない
背中から綺麗な羽根をしたためて
君は現れた
君の羽根はまだ柔らかで頼りないね
翌朝早起きした
君に会うためではないよ
テスト勉強の挽回をするためさ
君のせいで雨戸を閉めれず
朝日が眩しくて起きたのさ
言い訳しながら君に近づく
君は待ってましたと言わんばかり
朝日と一緒に飛び立った
残ったのは君の抜け殻だけ
昨夜の勉強の挽回は出来たから
心配しないで飛びまわれ
ミーンミン仲間とうるさいが
我慢してやるから庭の木止まって
声のシャワーを浴びさせろ

特別賞　齋藤　悠一郎

二〇二〇年夏

五十年に一度の大雨が今日も降っている
川が氾濫しそうだと
人は川沿いにバベルの塔を築く
最高気温は連日体温を超え
全ての教室にエアコンが入った
快適な学習環境と
熱風地獄と化したグラウンド
明日生きて目覚めるために
毎晩エアコンをかけて悪夢を見る
南極の氷でウイスキーを飲みたいという
父の願いは叶わないだろう
電車内では
マスクとスマホが必須アイテム
顔の見えない相手と戦い交信している
アトムが生まれまもなく二十年
未来を追い越してこの先
どこへ向かっていくのだろう

ぼくはパソコンの電源を落とし
街を離れて
カヤックで緑溶け込む川にこぎ出す
きらめく水面にアユが群れる
刻々と形を変えて雲が流れてゆく
ああ空はこんなにも広い
ぼくは大きく深呼吸をした

特別賞　菅原　優花

空色の風船

学校行事で風船を飛ばす
赤、黄、緑、紫、ピンク
教室でふわふわ浮くたくさんの風船
私に渡された空色の風船
空色は好きな色なのに
青空に霞むような気がした

空色の風船を青空にかざす
空色と空色
やはり君は青空に埋もれる
だが君は笑っている
そうか、君は…。
頭の霞が晴れた気がした

君は飛びたいんだね？空高く
君は飛びたいんだね？遠くへ
君は飛びたいんだね？限界の向こうへ
君ってなんだか私みたい
夢があるけど一歩踏み出せない
君の糸をぎゅっと強く握りしめた

君の夢
私が叶えるよ
君に託すよ
私の夢を

先生の合図が聞こえた
私はそっと手を離す
空色と白の世界に
赤、黄、緑、紫、ピンク、そして空色
たくさんの風船が色どった
たくさんの風船が旅立った

風のみに任せるな
悪天候に負けるな
高く、高く、高く
遠く、遠く、遠く
限界の向こうへ飛んでゆけ

特別賞　鈴木　毬子

あの日の私

時計が動いてる　いっぱい本がある
昔私が傷つけたテレビ
少し汚れたノート　ぶちまかれた教科書
これは私の居場所

キラキラした空気　運命の事故
会えない父　好きな人
嫌いな人
これは私の脳内

白目むいた青い猫が何百匹
二重の目が一つ　大量の紙類
本の題名　樹の上に三本の木
これは私の落書き

触(さわ)れない何か　消し去ったどれか
失いたくない誰か　忘れてしまった何処(どこ)か
捨ててもいい何時(いつ)か　放り投げた何故(なぜ)か
どこまでも堕ちてく私

割れて砕けてくピアノ
私はその時を見てた
壊れてった家
私は見なかったフリをした
歴史がある古い本
私はペンでぐしゃぐしゃにぬりつぶした

あの子は泣いてた　あの子は叫んでた
あの子は助けて欲しがってた
あの子はあの子はあの子はあの子はあの子はあの子は
でもそんなの知らない

見捨てようとして気付いた
ああ　あの子は私、私はあの子
ピアノは精神　家は肉体　本は人生
ごめんね

やっと、止まった

審査員奨励賞

一般の部

ことば

雪柳　あうこ

おはよう、の四文字なら
だいたい、十秒以上かかるだろう
読み取れないことばなら
問い返して、もう一度

視力を失ったあなたと
聴力を失ったわたしは
手のひらに文字を書き合って
たどたどしく通じ合う

あなたは見えない目で
わたしを探し
わたしは聞こえない耳で
あなたを聴く

互いの手探りで
ようやくたどり着いた
温かい手のひらに
時間をかけて、指で書く
問い返されたら、もう一度
何度でも

もどかしく、時間がかかっても
そんな言葉をわざわざ、と
言う人がいたとしても
信頼を紡ぎ、安心を形にしよう

指から、
おはよう　おやすみ　あいしてる
——手のひらへ

簡単な言葉ほど難しい
限られた伝達の中
いつからか、短縮されるとしても
ときには時間をかけて

もう一度
何度でも

小・中学生の部

心のてんびん

佐藤　蒼來

ぼくには、心のてんびんがある
そのかたむきは　重さではない　重さではない
人と人をのせてみる
白いかげの人も　黒いかげの人も
心のてんびんの上では　かたむかない

空と海をのせてみる
空には鳥が　海には魚が
心のてんびんの上では　かたむかない

明日は　なにをのせてみよう
月にしようか　太陽にしようか

それとも自分の心でものせてみようか
なにをしてもかたむかない
　ぼくの心のてんびんに

大丈夫

山崎　朝香

「あっそ、だから何？」と貴方は言う
ごめんねこんな話して
ごめんね話しかけて
大丈夫…大丈夫泣いちゃだめだ
　「自分で考えれば？」と貴方は言う
ごめんね自分一人で考えれなくて
ごめんね頼って
大丈夫…大丈夫泣いちゃだめだ
　「ついて来ないでよ」と貴方は言う
ごめんねついて来て
ごめんね空気読めなくて
大丈夫…大丈夫泣いちゃだめだ
　「お前なんて友達じゃない」と貴方は言う
ごめんね迷惑ばっかかけて
ごめんね頼りなくて
大丈夫…大丈夫泣いちゃだめだ

　「学校にまだ来てんの」と貴方は言う
ごめんね今日も学校来て
ごめんね私のこと見たくないよね
大丈夫…大丈夫泣いちゃだめ…
　「死んじゃえばいいのに」と貴方は言う

ごめんね生きてて
大丈夫…大丈夫もう……
　「大丈夫？辛い時相談乗るよ」と貴方は言ってくれた
思わず涙が大量にあふれ出る
自分に言い聞かせてた「大丈夫」は大丈夫じゃなかった

審査員紹介（敬称略）

表彰状

（裏　面）

川中子（かわなご）　義勝（よしかつ）

前日本詩人クラブ会長、日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、東京大学名誉教授

住所　埼玉県さいたま市

略歴

東京大学大学院修士課程修了。「詩は人類の母語」と唱え、ゲーテやロマン主義に多大な影響を与えたJ・G・ハーマンの研究で、平成十年アマーリエ・フォン・ガリツィン賞受賞（ドイツ）。平成二十二年日本詩人クラブ詩界賞、平成二十八年秋谷豊・詩鵠賞、平成二十九年第二十三回埼玉詩人賞受賞。日本詩人クラブ新人賞、同詩界賞選考委員などを重ね、第三十四回現代詩人賞選考委員長。日本現代詩歌文学館振興会評議員。詩誌「ERA」「彼方へ」を編集・発行。

著書

詩集「眩しい光」「ものみな声を」「ときの薫りに」「遙かな掌の記憶」「廻るときを」「魚の影　鳥の影」など。詩絵本・エッセイ「ふゆごもり」「ミンナと人形遣い」「散策の小径」、評論「詩人イエス―ドイツ文学から見た聖書詩学・序説」、共著「詩学入門」、翻訳「北方の博士・ハーマン著作選」「神への問い―ドイツ詩における神義論的問いの由来と行方」「ねずみにとどいたクリスマス」など。

原田（はらだ）　勇男（いさお）

日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、日本詩歌文学館評議員、宮城県詩人会顧問

住所　宮城県仙台市

略歴

早稲田大学在学中の二十歳から詩を書き始め、初期の「現代詩手帳」に投稿。詩誌「跫音」「コルサル」「エスプリ」「現代詩手帖」などに詩を発表。昭和四十三年、東京から仙台へ移住。昭和四十五年、宮城県芸術協会会員になる。昭和六十二年度宮城県芸術選奨、平成二十年度宮城県教育文化功労者表彰。第五十回H氏賞選考委員、第三十回現代詩人賞選考委員長、平成十八年より宮城県高等学校文芸コンクール詩部門審査委員長。

著書

詩集「北の旅」「炎の樹」「火の奥」「サード」、詩画集「夢の漂流物」（画・上野憲男）、詩集「エリック・サティの午後」「水惑星の北半球のまちで」「何億光年の彼方から」「炎の樹連禱」「かけがえのない魂の声を」、評論集「東日本大震災以後の海辺を歩く―みちのくからの声」、現代詩文庫２３４「原田勇男詩集」（思潮社）など。

佐々木洋一（ささき よういち）

日本現代詩人会会員、日本詩人クラブ会員、詩人会議運営委員、日本現代詩歌文学館振興会評議員

住所　宮城県栗原市栗駒

略歴

昭和五十六年、詩集「星々」により第二十回晩翠賞を受賞。平成十年度宮城県芸術選奨を受賞。平成十一年、詩集「キムラ」により第二十七回壺井繁治賞受賞。第一回モデラート賞受賞。第五十一回・第六十四回H氏賞選考委員。晩翠わかば賞・あおば賞選考委員。第四十一回から第四十九回壺井繁治賞選考委員。第三十七回現代詩人賞選考委員。令和二年度宮城県教育文化功労者表彰。個人誌「ササヤンカの村」発行。

著書

詩集「未来ササヤンカの村」「うれうれうぐうす小人」「星々」、新鋭詩人シリーズ「佐々木洋一詩集」、詩塊「０１」、詩選集「佐々木洋一詩集」、詩集「アイヤヤッチャア」「キムラ」「ここ、あそこ」、日本現代詩文庫「佐々木洋一詩集」、現代詩の十人「アンソロジー佐々木洋一」など。

三浦明博（みうら あきひろ）

小説家、コピーライター、日本推理作家協会会員

住所　宮城県仙台市

略歴

明治大学商学部卒業。仙台市でコピーライターとして二つの広告制作会社を経た後、平成元年に独立し、現在までフリーコピーライター。平成十二年にシンククエスト・ジャパン学際部門で、小学生向けのインターネット環境教育ソフト「ふしぎのとびら」によりプラチナ賞を団体受賞。平成十二年に第四十六回江戸川乱歩賞最終候補。平成十四年に第四十八回江戸川乱歩賞受賞。平成二十三年度宮城県芸術選奨（文芸部門）受賞。

著書

「滅びのモノクローム」「死水」「乱歩賞作家黒の謎」「サーカス市場」「罠釣師　トラッパーズ」「コワレモノ」「失われた季節に」「感染広告」「黄金幻魚」「盗作の報酬」「五郎丸の生涯」「ゴッド・スパイダー」「集団探偵」など。

渡辺通子（わたなべ みちこ）

東北学院大学教授、俳人「ほの会」代表、日本教育学会会員、俳人協会会員、国際俳句交流協会会員

住所　宮城県仙台市

略歴

早稲田大学大学院教育学研究科後期博士課程満期退学、公立高等学校教諭、茨城大学（非常勤）を経て平成二十一年四月東北学院大学准教授、宮城学院女子大学（非常勤）、早稲田大学（非常勤）。現在に至る。

著書

「未来都市」「鴻志」「言葉の力―東日本大震災に捧ぐ追悼の詩」「新現代俳句最前線」「花美術館松尾芭蕉」56号監修など。

第二十二回 白鳥省吾賞選評

思慮の深さと表現の明晰さ

川中子 義勝

今年はウィルス禍のために生活や行動に制限が強いられましたが、その中でも、深い思慮と明晰な表現をもった作品が多く寄せられました。最優秀賞を得た井上尚美さんの「葉桜の頃」はまさにその代表で、本賞の謳う「人間愛」を強く感じさせる作品でした。乳癌のために、これから手術に向かおうとする状況。冒頭の葉桜の描写や、控え室での家族の様子や看護師達の姿を述べる場面は落ち着いた筆致で、作者の温かい心持ちが溢れ、作品全体が明るさを湛えています。（あるはずの）病気ゆえの不安や恐れではなく、作品を充たしている明るさ、暖かさが読む者の心を惹きます。乳房にまつわる思い出として、授乳という至福の瞬間が想起されますが、その際の赤子の活きいきとした仕草など、印象深く表現されています。母となることを、花から葉への移行として受け止め、命の営みとして納得し、肯定するとき、詩が結晶しています。この肯定が詩の明るさの源です。

優秀賞を得た三船杏さんの「海を見ている」も、表現する意図がはっきりと伝わる作品。まず書き出しの譬えに工夫がみられます。若い方ですが、自身で津波の地を訪れ、真実を汲み取ろうとする気持ちは大切です。海を得体の知れないものとする把握は明確で、表現に気負いはありますが、この人なりの世界把握です。何よりも、若者の特権である一途さに訴えを感じます。これからが期待されます。同じく優秀賞を得た「青空」の明石裕里さんは、原爆投下後七十五年目の広島に住む方。その日と同じ青空の下、犬の散歩の道すがら出会う被爆樹木に心を寄せます。犬がヤナギと心を交わす様子に、作者も樹木の担う出来事の重みを想う。戦後生まれの方が大事な主題を扱っています。審査員奨励賞は、雪柳あうこさんの「ことば」。視力を失った人と聴力を失った人が、意思疎通をする困難が主題。伝えるのに時間がかかっても、無意味ではないと共感する作者の優しい心に惹かれます。

癌や震災、原爆の傷と向き合う

原田　勇男

白鳥省吾賞にふさわしいヒューマンな作品を求めて予備審査を通過した詩篇を読んだ。傑出した作品には出会えなかったが、本選対象の作品はそれなりに読み応えがあった。

井上尚美さんの「葉桜の頃」は、癌の手術で乳房を失う母親が初めて乳房を吸う子どものひたむきな命の営みに感動し、どんなことがあっても子どもを守ると決意した頃を思い出す。花から葉桜へ気持ちを切り替えた人生の区切り。手術を前にした女性の心境を切実に描いている。

三船杏さんの作品は、震災から十年が経過して被災地は復興へと舵を切り、建物を瓦礫に変え人間の命を奪った海を歴史のなかに閉じ込めようとしているのではないかと問いかける。若い感性のままに凶暴さを隠し持った海と対峙しながら震災について考えている。最近読んだ震災の詩の中で、出色の作品だと思う。

明石裕里さんの「青空」は、広島の原爆で傷ついた樹木がテーマである。犬の散歩道に並んでいる被爆のプレートをつけた樹木群。被爆当時は草木も生えないと言われたが、七十五年が経って逞しく生きている。犬が真摯に呼びかける。「よく生きていたね」とでも言うように。広島の地で青空に向かって健やかに伸びる樹木を歌ったさわやかな作品だ。

雪柳あうこさんの「ことば」は、視力を失った人と聴力を失った人が手のひらに文字を書き合って意志を通じようとする。なかなかすぐには通じない。だから時間をかけて何度でも指で

文字を書く。言葉を伝えることの大切さ。健常者にはわからない伝達の手段を表現している。文句なく審査員奨励賞に推薦した。ほかに関根裕治さんの「真夜中の指揮者」にも注目した。

新鮮で清しい作品

佐々木　洋一

栗駒に長い間住んでいるので栗駒のことは何でも知っているかというと、知らないことが多くあります。ここに住んで見えること、ここに住んでいるだけでは見えないこともあります。詩にもここだけではないあそこ、あそこだけではないここなど色んな見方が大切な気がします。様々な発想や書き方を自由に展開して欲しい。コロナ禍にもかかわらず今回も多様な世界に触れることが出来、得をしているのは毎年審査に拘わっているわたしなのではないかと思ったりしました。実感として、回を重ねるごとに素晴らしい作品が多くなりました。また、最終審査に残った作品は、入賞した作品と遜色がないということも言っておきたい。

コロナ禍の今回は、川中子審査員長が遠方ということで、リモートで行いました。予め予備審査通過作品を三人それぞれが点数を付け審査に臨む方法を取ったこともあり、入選作は順調に決まりました。最優秀賞の井上尚美「葉桜の頃」は、病に取り組む前向きな姿勢が率直に捉えられており、末尾の事務的に対応する看護師との対比が新鮮でした。四連目「あの日／私は花をすでに脱ぎ捨てていたのだろう／いのちを繋ぐために花を葉に変えることは／とても神秘的で美しい約束ごとなのだ」は、女性でなければ感じることが出来ない説得力のある言葉だと思いました。優秀賞の三船杏「海を見ている」は、震災をモチーフにした作品で、全体に若い気負いや硬さがあるのですが、それが逆に小気味よく感じました。対象をしっかり見つめた真っ直ぐな気持ちが清しい。十九歳の学生とのことであり、これを機会にさらに書き続けて欲しい。同じく優秀賞の明石裕里「青空」は、被爆後七十五年が経った広島、今でも立ち続ける樹木を通して、生き貫いてきたものへの深い思いがあります。また、人にはない嗅覚、聴覚の持ち主の犬の捉え方が的確。審査員奨励賞の雪柳あうこ「ことば」は、視力を失った人と聴力を失った人との関わりが簡潔な言葉で表現されています。相手を思いやる心持ちがとても美しい作品だと思いました。

力強い言葉、繊細な表現

三浦　明博

最優秀賞・山田陽輝君「背負い、繋ぐ。」は、物事をよく見つめた言葉の連なりで、先祖から受け継がれてきた郷里の景色の変容と、変わらない家族の光景を描いた。次は自分がその襷を繋いでいくのだとの宣言が、力強く伝わってくる。優秀賞・菊地小春さん「流れ星」は、姉と母親と三人で庭にシートを広げて流れ星を見たときの詩だが、一つひとつていねいに繊細に描かれ、目に浮かんでくるようだった。優秀賞・内山芽泉さん「夜中の訪問者」は、テスト勉強をしていた部屋にセミの幼虫が現われ、とつぜん脱皮し始めたエピソードをユーモラスに描き楽しく読めた。

特別賞・齋藤悠一郎君「二〇二〇年夏」は、前半での文明批判的なトーンの描写が、一転して、カヤックで緑溶け込む川へこぎ出していくという場面転換が鮮やかだと感心させられた。特別賞・菅原優花さん「空色の風船」は、学校行事で風船を飛ばす際の体験を書いた詩だが、空に放たれた空色の風船に、自分を重ね合わせた点がよかった。特別賞・鈴木毬子さん「あの日の私」は、つらい体験をへたみずからの内面を、選び抜いた単語と表現で描いており、韻を踏んでリズミカルな文章が心地よかった。

審査員奨励賞・佐藤蒼來さん「心のてんびん」は、自分の中にある心のてんびんに、いろんなものをのせてみるという内容で、短い詩だが、どこか心ひかれるものがあった。審査員奨励賞・山崎朝香さん「大丈夫」は、友人との距離をうまく測れない心のようすを、つい使いがちな大丈夫という言葉で表現しているが、自分の本心にたどり着いて「大丈夫」の裏表を書けたところがよかった。

withコロナの中の自然、人間愛

渡辺　通子

第二十二回白鳥省吾賞は、人類がかつて経験したことのない新型コロナウィルス禍の中での開催となった。小中学生の皆さんは、緊張や不安を強いられる日々を送っていることだろう。そのせいもあって応募数はやや減少したが、作品の質はむしろ向上している感があった。予選通過作品は三十編、今回は中学生の作品が上位に多く残った。

【最優秀賞】山田陽輝「背負い、繋ぐ。」は、変容する郷土、栗原の自然を鋭敏な感覚で捉えながら、そこに生きる家族の愛を詠んだ。夕餉の準備をする母の姿を描く作者の眼差しには作者の成長もみてとれる。風土と共に生きる決意が活き活きと描かれ、コロナ禍にあった年の最優秀賞にふさわしい作品である。

【優秀賞】菊地小春「流れ星」は、母と姉とで夜空を観測する様子を描いた、明るく躍動感ある作品。同じ星空を見ていても、見える流れ星の様子は三者三様。

【優秀賞】内山芽泉「夜中の訪問者」は、テスト勉強に勤しむ作者が思いがけずも遭遇した蝉の脱皮をユーモラスに描く。微細な観察描写がよい。

【特別賞】齋藤悠一郎「二〇二〇年夏」は、自然災害やコロナ禍の中で目の当たりにした、急激なデジタル社会の到来に翻弄される街を描く。「未来を追い越してこの先／どこへ向かっていくのだろう」は人類に向かっての作者の問いかけ。

【特別賞】菅原優花「空色の風船」は、空に飛ぶたくさんの風船の鮮やかな色が目に浮かぶような作品。その中のひとつの風船に、ともすれば大勢の中に埋もれがちな自分の姿を重ね合わせる。

【特別賞】鈴木毬子「あの日の私」。思春期の心模様は複雑である。居場所というアイデンティティを探し出そうともがき苦しむ。ある人はそれを哲学すると言う。

【審査員奨励賞】佐藤蒼来「心のてんびん」は、てんびんに託して自身の揺るぎない価値観を歌う。

【審査員奨励賞】山崎朝香「大丈夫」。「大丈夫」という言葉は、本当はSOSのサイン。

その他、荒川智哉「上へ下へ上へ」、高橋奏惺「父と僕」、佐々木優杏「四等星」が印象に残った。

寄稿

第21回白鳥省吾賞を受賞して

照井　良平

瞬間的に、今年も白鳥省吾賞の季節がやってきたか、と事務局からの寄稿依頼電話で思った。昨年の最初の電話は賞候補にあがった。次の電話は最優秀賞を受賞したとの祝いも含めた電話であった。その時の嬉しさが未だに目に浮かぶ…、いや小躍りしている。いやいや脳細胞の奥に焼き付いているとでも言いたい、私へのとんでもない出来事であった。

授賞式での挨拶でも、瞬間的に出た言葉が、自然を相手にする農業人の言葉であった。

「ホホウ『訛る田んぼアート』だってぇ。なんともいいごどだねぁ。『うんうん、訛ってる。訛っている』かなり訛っている。そっ、そこなんだでば。受賞作品『訛る田んぼアート』は訛ってなければダメなんでがぁんす」

などと生意気に話したことも脳味噌の田んぼから、にょきにょきと芽っこを出し、大きく育って見え、思い出されてきます。

それが今年は、コロナ禍で式は中止となったと聞き、やはり残念で「ウーン」と止むを得ないところかと思うのです。が、昨年の三月に独文化相のモニカ・グリュッタース氏が、コロナ禍の文化芸術に対し「アーティストは今、生命維持に必要不可欠な存在である」と述べています。この視点からすれば、白鳥省吾賞の催しはじめ詩は、人間の心に指針となる生きる力を与える「必要火急」の文化芸術であって、「不要不急」のものではないと思うところです。感染防止上、止むを得ずとしても、根底にこの思考が存在している。ここが肝要だと思うところです。ややもすると中央の社会風潮に「不要不急」と取り違えている部分がなきにしもあらずだからです。

「そう、あってはいけない。」と民衆派詩人の白鳥先生ならば思っているはずです。

栗原市の土の上を歩き、あの澄んだ空気を吸うことがとても素晴らしいことです。昨年歩いてそう思い、今もそう思っています。

（第二十一回白鳥省吾賞
一般の部　最優秀賞受賞者）

「白鳥省吾賞」は、現栗原市長千葉健司氏のご尊父徳穂様が築館町長ご在任中に創設され、今年で第二十二回を迎えることができました。これもひとえに市長をはじめとする市関係者、審査員の先生方、その他多くの方々の熱意とご努力によるものと親族一同感謝しております。

今回は新型コロナウイルス感染症の全国的な拡大により、学校の臨時休校や新たな生活様式が求められる中での作品募集となりました。このような状況下においても、「継続は力なり」と申しますが、全国各地から千三百十八編の応募作品を頂き、大変ありがたく思っております。

従来、日本の詩は和歌、俳句を体系とする定形型の短詩型による抒情詩や難解な言葉をちりばめた詩がよいものとされてきました。しかし、父白鳥省吾は「詩は特別な文学形態でも無く、一部の人々の物でもなく、人々の日常生活における心の表現を言葉にするものであり、それ自体、社会性を持つものでなければならない」と主張し、民衆詩派の詩人として「誰でも作れる口語による自由詩」の普及に力を注ぎました。この父の考えに影響を与えたのが、米国の国民的詩人ウォルト・ホイットマンでした。ホイットマンは自由、平等、友愛の精神に基づいて、誰もが分かる平易な言葉で人間、平和、世界、自然をありのままに表現し、彼の詩集「草の葉」は現在でもあらゆる階層のアメリカ人の心の支えとして愛読されています。

入選された作品はいずれも質が高く、これからもご自分の考え、経験、想像力を「日ごろ使っている平易な言葉」で表現し、家族、友人、さらに見知らぬ人々に共感と感動を与えて頂きたいと思います。この賞の益々のご発展をお祈りすると同時に、今回入賞された方々のさらなるご精進をご期待申し上げます。

白鳥　東五

白鳥省吾氏御令息
東京都世田谷区在住

白鳥省吾関連図書紹介

(1)

『白鳥省吾の詩とその生涯』

築館町教育委員会・編集

価格　一、五〇〇円（二百四十六ページ）

民衆詩派の代表詩人である白鳥省吾の詩業と生涯をまとめ、築館町合併三十周年記念事業として、昭和六十一年二月に発刊。

第一部は省吾の詩情を育んだ風土と環境を、第二部は郷土を素材とした作品を網羅し、第三部では詩業を取り上げている。

市教育委員会、白鳥省吾記念館で販売。

(2)

『白鳥省吾のふるさと逍遥』

白鳥省吾ふるさと逍遥編集委員会・編集

価格　二、〇〇〇円（二百二十七ページ）

省吾の甥、敬一が生前「生涯ふるさとを愛し続けた詩人、白鳥省吾」を郷土の人々に伝えようとした遺稿を、妻の白鳥ナヲエさんが平成十二年一月に自費出版。

「ふるさと随想」「家族」「母校・学友」「詩のこころ」の五章と併せ、省吾の詩業や文学碑、校歌、音頭などで構成。巻頭には、省吾とふるさとの人々のふれあいの貴重な写真を数多く収録している。

(3)

『詩人・白鳥省吾　佐藤吉一評論集』

佐藤　吉一・著

価格　二、〇〇〇円（六百五十五ページ）

詩人・白鳥省吾の事蹟はもとより、単行本や発表誌などの書誌、交友録、創作に至った由縁、作詞した校歌の一覧、刻まれた碑の所在などを実地調査に基づいて収集した評論集。著者の佐藤吉一氏は、白鳥省吾研究会代表。二〇一四年七月出版。

(4)

『白鳥省吾物語　全五巻』

佐藤　吉一・編著

価格　第一巻・第二巻　各二、三〇〇円（二百五十ページ）
第三巻・第四巻　各二、〇〇〇円（二百ページ）
第五巻　二、三〇〇円（二百四十九ページ）

定本となった『白鳥省吾物語　上・下』（二〇〇二年出版）は、第七回日本自費出版文化賞を受賞した。二〇〇六年二月出版。

都道府県別応募状況

応募総数一、三一八編

●一般（高校生以上）の部　七四八編

●小・中学生の部　五七〇編

都道府県		一般	小・中学生	合計
北海道		22	0	22
東北	青森	15	1	16
	岩手	13	0	13
	宮城	55	504	559
	秋田	8	0	8
	山形	7	3	10
	福島	6	0	6
小計		104	508	612
関東	茨城	20	2	22
	栃木	10	0	10
	群馬	6	0	6
	埼玉	54	13	67
	千葉	34	0	34
	東京	98	0	98
	神奈川	57	0	57
小計		279	15	294
北陸・中部	新潟	10	0	10
	富山	5	0	5
	石川	1	0	1
	福井	5	0	5
	山梨	8	0	8
	長野	8	0	8
	岐阜	13	0	13
	静岡	27	0	27
	愛知	23	5	28
小計		100	5	105
海外		0	0	0

都道府県		一般	小・中学生	合計
近畿	三重	5	0	5
	滋賀	11	0	11
	京都	22	38	60
	大阪	37	0	37
	兵庫	30	3	33
	奈良	0	0	0
	和歌山	2	0	2
小計		107	41	148
中国	鳥取	4	0	4
	島根	3	0	3
	岡山	11	0	11
	広島	10	0	10
	山口	10	0	10
小計		38	0	38
四国	徳島	0	0	0
	香川	6	0	6
	愛媛	6	0	6
	高知	5	0	5
小計		17	0	17
九州・沖縄	福岡	28	0	28
	佐賀	7	1	8
	長崎	4	0	4
	熊本	9	0	9
	大分	5	0	5
	宮崎	8	0	8
	鹿児島	11	0	11
	沖縄	9	0	9
小計		81	1	82
合計		748	570	1,318

第二十二回白鳥省吾賞

「詩」募集概要

［作品内容・応募資格］

一　募集作品は、「白鳥省吾賞」のために創作された「自然」「人間愛」のいずれかをテーマとした詩とする。

二　形式は、日本語表記による口語自由詩で、自作による未発表作品とする。

三　作品は、一点につき四〇〇字詰め原稿用紙二枚以内とする。

四　応募資格は、国籍、年齢、プロ、アマなどを一切問わない。

［その他］

一　入賞作品の著作権は原作者に帰属する。ただし、入賞作品の紹介及び白鳥省吾賞の普及を目的とする場合は、主催者は入賞作品を自由に使用できるものとし、応募時において承諾されたものとする。

二　応募に際しては、第三者の著作権を侵害しないこと。侵害行為と認められた場合は、受賞後でも賞の取消をする場合があること。また、入賞作品の著作権等について第三者から異議申し立て、苦情などがあった場合、主催者は一切の責任を負わず、費用負担などを含め受賞者がすべて対応すること。

白鳥省吾記念館

栗原市公式ウェブサイト　https://www.kuriharacity.jp

正面入口

常設展示室

〒987-2252
宮城県栗原市築館薬師三丁目３番26号
TEL 0228-23-7967　FAX 0228-21-1404

［入館料］

一般　　210円（団体の場合は一人170円）
小中高校生　110円（団体の場合は一人　90円）
※団体は、20名以上の場合。

［開館日・開館時間］

毎週火曜日から日曜日まで
午前９時から午後４時30分まで

［休館日］

毎週月曜日
国民の祝日(祝日が月曜日の場合は翌日)
年末年始(12月29日から翌年１月３日まで)
特別整理期間

編集後記

二十二回目を迎えました今回の白鳥省吾賞は、新型コロナウイルス感染症の拡大する最中で募集開始となりました。学校の休校による夏休みの短縮や、新しい生活様式などの影響で応募作品数が大幅に減少することを覚悟しておりましたが、「一般（高校生以上）の部」七百四十八編、「小・中学生の部」五百七十編、合計千三百十八編もの作品が寄せられました。ご応募いただいた皆様に感謝申し上げます。また、外出・移動が制限される中で審査会にご出席いただき、多くの作品の審査にあたっていただいた先生方には、大変ご苦労をおかけいたしました。重ねて感謝申し上げます。

白鳥省吾賞の応募作品は、回数を重ねるにつれて「未来に飛躍する肯定的精神」をもつ詩が多く見受けられるようになり、作品の質が非常に良くなってきたとの審査員の評価をいただいております。また、これまでの入選者の中には、詩壇で活躍されている方も見受けられるようになり、主催者として喜びに堪えないところであります。

今回は受賞者の皆様、ご列席いただく皆様の安全を最優先に考慮し表彰式を中止いたしましたが、白鳥省吾賞の詩の募集は、今後とも続けてまいります。引き続き多くの皆様のご応募をよろしくお願い申し上げます。

最後に、受賞されました皆様のますますのご活躍をお祈りいたしますとともに、審査員はじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和三年二月　発行
白鳥省吾記念館　編集・発行